機那サフラン酒本舗

鏝絵の謎解き

解く鍵は「兼任と転換」

Interlock and Conversion

2020年7月2日

春日

薬用酒の製造販売で財をなした金持ちのゴテゴテ趣味、なんていうコメントを見かけた方も、おられるのではないでしょうか。

でも、単なる成金趣味とみると、そこに潜む、見落としてしまうものがあるかも知れません。そんなお話です。

機那サフラン酒本舗の屋敷の主題

龍
五行
五大
十二支

地域安寧
五穀豊穣

商売繁盛・事業繁栄
子孫繁栄

龍のmetaphor(隠喩)
自然の石、
　木に潜む霊力

招福
魔除け

恐らく、こうだと思いつつ、いまひとつ、
しっくりこない気持ちでした。

でも、絵柄と配置の双方に、
仕掛けがあったのです。
その訳を知ると、確信に変わるのです。

以下は、その謎解きのストーリーです。

１. 絵柄の謎解き

２. 配置の謎解き

３. 仁太郎ワールド

１．絵柄の謎解き

（1） 基本的な問い

鏝絵蔵の東面、南の守護神の朱雀の色が、
なぜ朱でなく、青なのか？
北面の十二支の寅に、なぜ縞がないのか？

（2） 申は、本当に、いないのか。

代わりとなり得るものは？

衣装蔵の絵柄の意味は？

基本(1)　朱雀の色が、 なぜ朱でなく、青なのか？

～　鏝絵蔵工事中の職人の会話の「キンベル」は
　キングオブブルー(熱帯睡蓮)の花の色。
　　「消えゆく左官職人の技　鏝絵」p.9

～五神の朱雀を、五虫の鱗虫の長である
　鳳凰に「兼任」させよう。

↓

鳳凰の色は、耀くような発色の
キングオブブルーにしようと考えたのでは。

基本(2)　寅に、なぜ縞がないのか？

～十二支の寅を、五神の白虎が、
「兼任」しているのでは。

↓

～西の守護神の白虎に、東の座を
遠慮してもらったと考えます。

仁太郎さんは、それについて、
ひとことも残さなかった　・・・

謎解きであることさえ、教えなかった。
見る人にまかせようというのが、
彼の本音ではないか・・・

では、衣裳蔵の鏝絵の意味は

白虎と玄武は、わかります
では・・・

白虎と玄武は、わかります。では・・・

鯉、小鳥は、生長した後の、
龍と鳳凰のことでは、ないのか

［転換、生長］

白虎も幼く見えますね。
そう、白虎の子供なんです。

衣裳蔵の完成と鏝絵蔵の着手が同時期
～二つの蔵の絵柄を、同時に考えたはず。

二つの蔵でワンセットの物語と捉え、
衣裳蔵は将来の成功を期する意図を、
鏝絵蔵は達成した成功状態を守り、
更に飛躍を期する意図を示したように
思えるのです。
ここにも「転換・生長」の仕掛けが見えます。

申の居場所に悩みましたが

十二支を飾ることは、元来、五穀豊穣を意味する穀物の十二ヶ月を意味しており、ひとつでも欠けたら穀物は実りません。

欠けてはならないのです。必ず、十二、揃っている筈と考えたほうが自然です。

また来られる取引先についても、自分の干支がないと、気づいたら、がっかりする方もいる筈で、そんな無粋なことを、商売熱心な仁太郎さんが、なさるわけがないでしょう。

申の居場所の謎解きの開始

申をヒトと仮定したときの居場所

「左伊」(作者)に、ヒトの代表になってもらう
見物のお客に、ヒトの代表になってもらう
　　これも、いいが・・・

もしかしたら、他の「兼任」と同様、
神になっているのでは・・・

大黒様、恵比須様を、商売繁盛と
だけ考えてはいけないのでは・・・

申の居場所

五行のひとつ、五虫の中央、長に
対応する「聖人」を意味するのでは
ないか。

七福神の中で、「裕福」と「清廉」に対応
する、大黒天と恵比須様ではないか

七福神とは、
人の本質である最も尊い宝とされる
「寿命・裕福・人望・清廉・愛敬・
威光・大量」。
それらを、順に神仏聖人の
「寿老人、大黒天、福禄寿、恵比寿、
弁財天、毘沙門、布袋」で崇敬したもの。

商売繁盛と人間理想の聖人とを兼ねさせた、
仁太郎さんの仏教的な現世肯定の思想を
具現化しているように感じます。

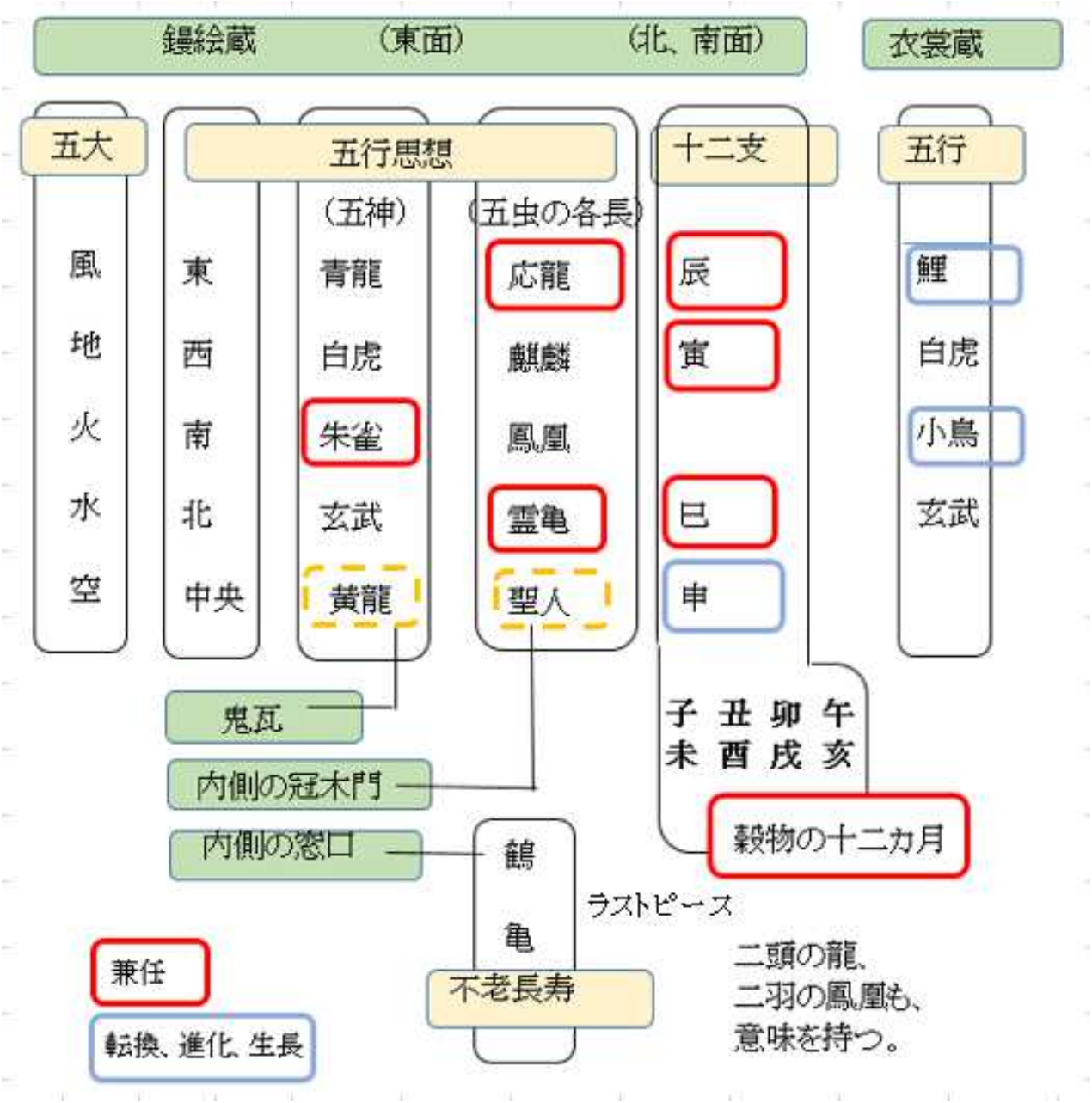
鏝絵蔵の窓・扉の１３枚に軒下の１枚の
鏝絵、そして土間面の隠し玉の４枚の
絵柄の「ラストピース」として

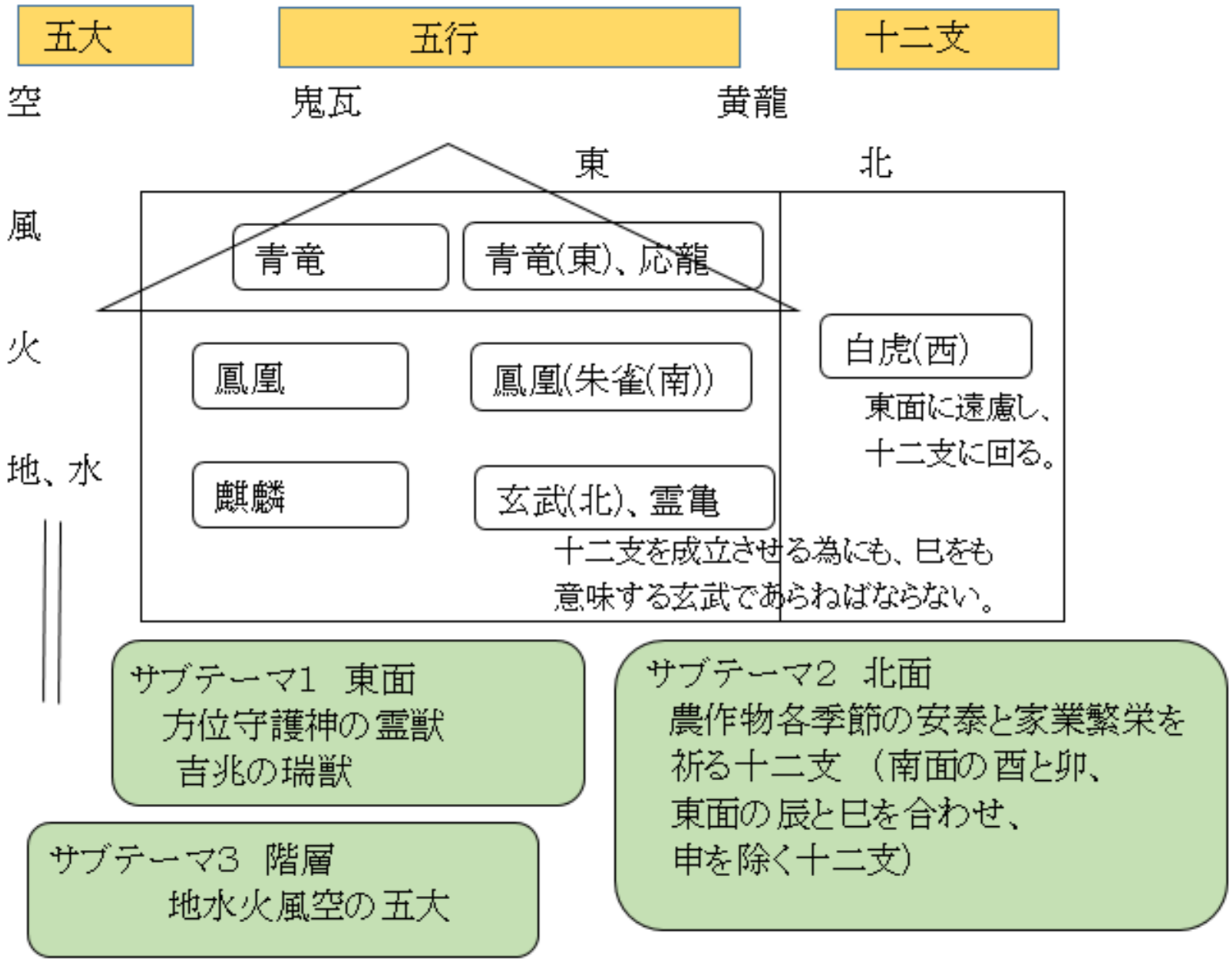
はじめて自分だけのための祈り、
長寿を「鶴と亀」に託した。

これにて全ての絵柄の選定が完成です。

以上で、１．絵柄の謎解きを
終わります。

次は、２．配置の謎解き　についてです。


鏝絵蔵
(東面)
(北、南面)
衣裳蔵
五大
風
地
火
水
空
五行思想
東
西
南
北
中央
(五神)
青龍
白虎
朱雀
玄武
黄龍
(五虫の各長)
応龍
麒麟
鳳凰
霊亀
聖人
十二支
辰
寅
巳
申
子 丑 卯 午
未 酉 戌 亥
穀物の十二カ月
五行
鯉
白虎
小鳥
玄武
鬼瓦
内側の冠木門
内側の窓口
鶴
亀
ラストピース
不老長寿
二頭の龍、
二羽の鳳凰も、
意味を持つ。
兼任
転換、進化、生長


五大
五行
十二支
空
鬼瓦
黄龍
東
北
風
青竜
青竜(東)、応龍
火
鳳凰
鳳凰(朱雀(南))
白虎(西)
東面に遠慮し、
十二支に回る。
地、水
麒麟
玄武(北)、霊亀
十二支を成立させる為にも、巳をも
意味する玄武であらねばならない。
サブテーマ1　東面
方位守護神の霊獣
吉兆の瑞獣
サブテーマ2　北面
農作物各季節の安泰と家業繁栄を
祈る十二支　（南面の酉と卯、
東面の辰と巳を合わせ、
申を除く十二支）
サブテーマ3　階層
地水火風空の五大

五大の、地（ち）・水（すい）・火（か）・風（ふう）・空（くう）との対応

空（くう）には、鬼瓦の龍・黄龍、
風（ふう）には、軒下の青龍・応龍、
火（か）には、朱雀・鳳凰、
地（ち）・水（すい）にはそれぞれ
麒麟と玄武・霊亀が対応する。
五大と五行の両立は、見事です。

二羽の鳳凰
～雌雄に対応、鳳が雄、雌が凰。

鬼瓦にも、庭園の噴水にも二頭の龍
～双龍には、力の循環の意味。
　でも離れの屏風は一頭ですから
　自信ありません。

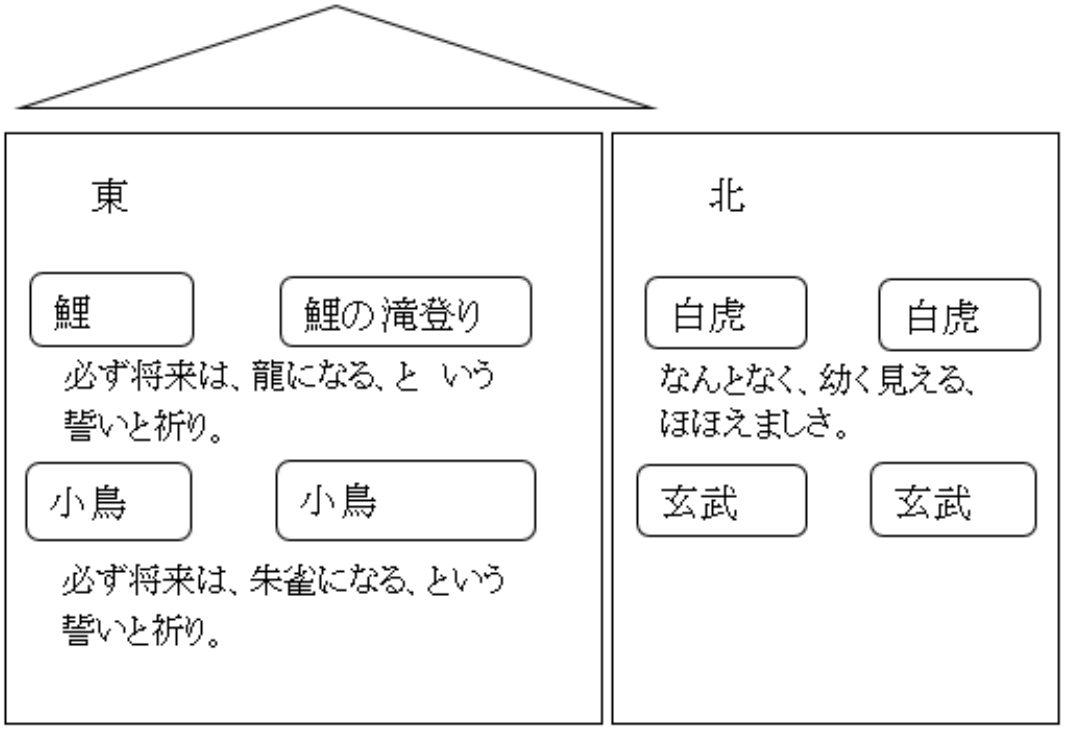
十二支の配置

背景の植物の意味も併せて考えると、
北面の二階は物事の開始の成功を祈り、
一階は成功の継続、子孫繁栄を祈るように見えますが、まだ確証がありません。
「馬にサクラ」のお遊びもあるので、あまり悩む必要はないのかも知れません。

衣装蔵の8枚の鏝絵の配置

東の上に鯉、下に小鳥。
北の上に寅、下に玄武。
もう、お分かりですね。
「兼任と転換・生長」の合わせ技。しかも、
この東、北の二面、上下の配置は、まさに
これしかない、最適の配置と気づきます。
あざやか、と感心するしかない。

その前段として、衣装蔵は、誓いと祈り



従って、鏝絵蔵の主題が四霊獣であることは、明白

限られた枚数の場所に、五行ほか複数の概念をの動物を過不足なく登場させるという難問。

鏝絵蔵では窓１３枚、軒下１枚の１４枚の場所に

4+4+12=２０の動物の姿を見せるということ。

（内側の４枚は、あくまで補足）

その難問解決には、「兼任と転換」という取り組みが必須でした。考えに考え抜かれた兼任・転換による選択と配置です。

３．仁太郎ワールド

二棟の鏝絵の絵柄に、込めた祈り。
主屋、米蔵など全棟の鬼瓦、
庭園、離れにも、祈りのシンボル満載。

これしかない、という選択と配置
盛りだくさんの祈りと感謝

機那サフラン酒本舗の屋敷の主題

龍
五行
五大
十二支

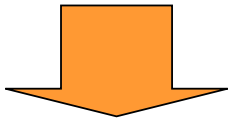
地域安寧
五穀豊穣

商売繁盛・事業繁栄
子孫繁栄

龍のmetaphor(隠喩)
自然の石、
　木に潜む霊力

招福
魔除け

もう成金趣味なんていう気持ちには、なれないでしょう。



でも、独学では難しそうです。

仁太郎さんに、このような発想を教えた先生役が絶対に居たはずです。

星野本店さんの土蔵の扉の家訓といい、

サフラン酒の配置に込めた意味といい、

明治の摂田屋は、大変な先生の来訪、或いは書の流入がたびたびあった。文化も薫る町だったのです。

では、先生役の人は、どんな人か。

江戸から来た儒学者か。
あるいは長善館、三余堂、朝陽館の先生や卒業生か。
または旧藩校崇徳館の先生や卒業生・・・。

戊辰の役の敗戦で荒廃した長岡を救ったのは、商家の主を中心とした商売の勉強会の「ランプ会」。そのような勉強会は、商売の学問だけではなかったと思う。銀行業、石油業・・・。

↓

儒学の学問でも、漢学塾や学校以外に、裕福な商家の当主達の周りに、勉強会が、存在していたのではないか。

これが、いつか解き明かしたい「問い」です。

私の結論

仁太郎さんは、家屋敷、工場を、
祈りの空間として荘厳した。

それは、前述の解釈が、
偶然とは考えられないからである。

しかし、見る人に、正面切って、
謎解きを強いることは、しなかった。

しかも、解答を、どこにも残さなかった。
これは、お客様に、失礼とならぬように、
という奥ゆかしさからである。

それゆえ、問い自体を、隠したのである。

一方、問い、解答を、探し出した人には、
それを知る喜びを残してくれた。

凄いことを考えたものです。

でも、周りの協力者と共に、摂田屋に、
竹駒稲荷、金比羅様など、いつくかの神社を
勧請し、また生まれ故郷の定明村の
八幡様に、度重なる寄進を施したのも、
吉沢仁太郎です。

当たり前でしょうが、近くの菩提寺である
鷺の巣・定正院にも寄進をしています。

神仏に篤い心をもった仁太郎さんです。
仁太郎ワールドを作ろうとしたのも、
分かるように感じませんか。

これしかない、という選択と配置
盛りだくさんの祈りと感謝

仁太郎さんの「隠した謎解き」を、
楽しみましょう。

補足

鏝絵のストーリーであり、「龍」については殆ど話しておりませんが、四霊獣や四瑞獣(虫)、十二支が、鏝絵蔵、衣装蔵の主題であるのに対し、「龍」こそが、サフラン酒の屋敷全体を覆うメインテーマだと思います。

むしろ、摂田屋に移転後建造した主屋や米蔵、工場の屋根の鬼瓦が、守護神のはじまりです。

たくさんの建物の屋根に置いた「龍」に、屋敷を守ってくれと、仁太郎さんは祈ったのです。

補足

鬼瓦は西アジアに起源をもち、シルクロード経由で日本に伝わった、厄除けの意味を持つ装飾です。

龍は、釈迦が悟りを開く時に守護したとされ、仏教に竜王として取り入れられて日本に伝わり、元々日本に太古からあった蛇神信仰（雨や雷を呼ぶ天候をつかさどる豊穣神）と融合したものです。水神、火防の守護神としてのシンボルでもあります。

ヨーロッパのドラゴンのような乱暴な悪物ではなく、アジアの龍は、善神であり、守護神なのです。

補足

35年前、新進の研究者時代の藤森先生が、「龍が38匹、鯉が10尾、・・・」という記録を雑誌に残されています。

季刊「銀花」(1985年冬号)

将来は龍になろうとする滝登りの鯉だけでなく、不動明王自身が仏法の守護神で、持っている炎の剣にも龍が巻きついているそうです。

コレクションにも鯉仙人、不動明王の置物があります。庭の噴水の龍や離れの屏風絵の龍もあり、まさに随所に龍がいます。

補足

巨石、名石のもつパワー、巨木、名木のもつパワーに守られた、庭園、離れにも、龍とそのシンボルが、そこかしこに見られます。

更に、離れには、一階、二階の全てのガラス窓の四隅にしつらえた猪の目の魔除け、二階の廊下の手摺りにしつらえた宝珠に込めた魔除け。まさに祈りと魔除けが満載です。

補足

博物学者の荒俣先生は、30年前に出版した「黄金伝説」で仁太郎さんらの全国の史跡を、『近代成金の夢の跡』と、本のカバーで云い放ちました。

この発言が有名になりすぎてしまい、10年前に出版した「アラマタ美術誌」で述べた、新しい解釈の「祈り」は、余り知られていません。

私の「鏝絵の謎解き」は、荒俣先生の、この新しい解釈の正しさを、状況証拠だけですが、立件してみせようとする「試み」でもあります。

立件するに足るロジックだったでしょうか。

補足

絵柄の選択、配置を考え合わせますと、金持ちの道楽、贅沢三昧などと笑いとばすことなど、絶対にできません。仁太郎さんも、がっかりするに違いないと思わざるを得ないのです。

ゲストの皆さんには、鏝絵蔵や離れの精緻な造りとともに、精一杯、この祈りの空間も感じていただきたいと思っています。